



苦しめ ～第一回PHP作文甲子園 心に残るあの人の言葉から～

校長 田中 俊光

PHPという月刊誌があります。「PEACE and HAPPINESS through PROSPERITY」の頭文字で「物心両面の調和ある豊かさによって平和と幸福をもたらそう」という意味で、パナソニック株式会社の創業者である松下幸之助まつしたこうのすけによって創設された出版社PHP研究所が出している本です。今回の校長室だよりでは、第一回PHP作文甲子園 優秀賞受賞作を紹介いたします。

「苦しめ」

広島市・安田女子高等学校2年

「苦しめ」。この言葉だけ聞くと、ただ単に辛い言葉に聞こえてくるだろう。私にこの言葉を言ったのは、小学二年生のときに担任だった先生である。

当時の私は算数がとても苦手で授業にもついていけていなかった。

ある日の算数の時間、みんなで問題を解いているとき、わからずに完全に手が止まっている私のところに先生が来て、「どこがわからないの？」と聞いてきた。私はわからないところをたず尋ね、解説してもらった。

ところがそのとき、正直にいうと私は先生の説明が全く理解できておらず、みんなは解けているのに、自分だけこうやって先生に教えてもらっていることがはずかしく、頭を縦にふりながら、「あー、わかったわかった」と言い、早くこの状態を終わらせようとしていた。

そのとき先生が私のひたいに指を当てながら、「**わかったふりをするな、ちゃんと苦しめ!**」と怒鳴ってきた。当時の私はその言葉を聞いても、何も考えず、ただ単にそう言われたことに腹を立てていただけだった。

困難から逃げず、ちゃんと向き合う

そして小学校の卒業式のとき、その先生にあいさつしに行き、「苦しめ」と言われたときの話をしていたら、先生が、

「あのとき、私に苦しめって言われてびっくりさせてしまっただろうけど、**人は困難にぶつかったとき、逃げずにちゃんと向き合って苦しまないと成長なんてできないと思うの**」

と言った。

私はそのとき、あの頃腹を立てていた自分を憎く思った。

そして先生は再び口を開き、「これから中学・高校と勉強とかいろいろ大変だろうけど、そのときも逃げないでちゃんと苦しんでね」とにこにこしながら言ってきた。私は苦笑いしかできなかったが、その言葉にも自分に成長してほしいという先生の思いがあったと思った。

高校2年生の今でも、たまにあの頃先生が言った「苦しめ」が頭にひび響いてくる。

(第一回PHP作文甲子園 優秀賞受賞作 PHP平成30年4月号No. 839)

発達障害の弟～心の輪を広げる体験作文から～

校長室の本棚を整理していると、「平成29年度 心の輪を広げる体験作文」の本がありました。この本の中で一番印象に残った作文を紹介します。

「発達障害の弟」

兵庫県加古川市立氷丘中学校 2年

私には小学6年の弟がいます。弟は発達障害です。弟は小学3年生の時、軽いイジメにあい、学校に行けなくなりましたが、今は別室登校で少しの時間だけ行けるようになりました。でも、子どもは苦手で、大勢いる教室に入ることは出来ません。

では、そうなったのは弟が悪いのでしょうか？イジメた子が悪いのでしょうか？確かにイジメは悪いと思います。でも発達障害の弟が、知らずに相手を傷つけていたかもしれません。そこで私は、発達障害というのがどういう障害で、母がどんな苦勞をしているのか、母から聞いたことを書きたいと思います。発達障害は個人でかなり特徴が異なるので、あくまでも弟の場合として書きます。

弟は生まれた時から少し普通の赤ちゃんとは違ってました。赤ちゃんは普通お母さんに抱っこされたら喜ぶと思います。でも弟はビクビクしたそうです。そして、あまり泣かない赤ちゃんだったそうです。泣かない事にはそれほど疑問に思わなかったのですが、体に触れるとビクビクするのは「あれ？」と思ったそうです。生後一か月の健診で小児科の先生に相談して、「ちょっと敏感、要観察」と言われ、四か月健診でも要観察でした。様子が変わりだしたのは離乳食を始めた五か月を過ぎた頃でした。柔らかい粥だけだったら良かったのですが、味付けで顕著に食べない物が出てきました。離乳食が進んで固形物になると、全部吐き出します。母は何とか食べさせようと苦勞したそうです。十か月検診の時、今まで要観察だった弟は初めて運動機能で再健診と言われました。動かない、座らせようとすると後ろにひっくり返る。寝返りもしないので、上を向いたままじっとし続ける赤ちゃんだったそうです。離乳食を食べないという状況も含めて、これらの症状は弟の**触覚過敏**という現象の現れだったそうです。その健診の時、発達障害という言葉を目は初めて聞いて、そこから母自身も発達障害の事、弟との接し方を勉強していったと言っていました。母は早くから発達障害として対処が出来たから助かったと今でも言っています。助かったというのは、**育てにくいには原因があり、どうしようもない事だと割り切ることができるので、母自身がイライラせずに済み、弟にも無理やり頑張らせてストレスを溜めさせずに済むからだ**そうです。

他にも弟には色々な症状があります。**味覚過敏**（甘い辛いに敏感で、慣れた味付けの物しか食べられない）。こだわりの強さ。コミュニケーションが苦手。このコミュニケーションの苦手さがイジメにつながったのだと思います。弟に悪気がなくても、**記憶力が良く自分が知っていることは相手も知っていると思込んでしまう上に、かなり生意気な話し方をします**。ずっと一緒にいる私は当たり前になっていますが、知らなければ、気分を害されるかもしれません。

では、どうしたらいいのでしょうか。学習や成長と共に少しは対処できるようになるかもしれませんが、発達障害は治りません。それなら、個性の一つとして認めてあげられないのでしょうか。それは発達障害の人だけでなく、私たち一人ひとりの性格が違うように、一つの性格だと思えないでしょうか。もし、周りに溶け込めない人、「あれ？」と思うような人がいたら、差別するのではなく、**その人も困っているかもしれないので、手を差し伸べ、一緒に考えてあげられないでしょうか。そうすれば、お互いがイライラせず、ストレスも軽減でき、もっと住みよい社会になっていく**と思います。今回私は母と話をすることで、直ぐに理解し行動することは難しくても、世の中には頑張ろうと思っても出来ない、直そうと思ってもどうしようもない人がいるということを知ることができました。

(平成29年度 心の輪を広げる体験作文 中学生部門 佳作)